

松本・波田の温泉施設 間伐材や松枯れ被害木活用

木材チップを主力燃料に

松本市波田の市有温泉施設「竜島温泉せせらぎの湯」が、地元の間伐材や松枯れ被害木を加工したチップを燃やすボイラーの利用を本格化させている。2019年5月の稼働からしばらくの間、灯油ボイラーの補助用にチップボイラーを使ってきたが、昨年から木材チップをメインの燃料に切り替えた。地域の森林資源を有効活用しつつ、高騰する燃料代の削減にもつなげている。

チップボイラーは、伐採後に山中に残されることが多い間伐材や剪定枝を活用しようと、市が国の補助金を活用して約4千万円で購入した。せせらぎの湯に設置し、カランやシャワーで使う湯を沸かしたり、源泉を加温したりするのに使っている。

灯油代を削減 市「普及させたい」



竜島温泉せせらぎの湯に設置されている木材チップのボイラー(左)と保管庫

市によると、チップボイラーの灯油の年間使用量は5万2300リットルで、購入前は475万円

だった。チップボイラー導入後、段階的に灯油の使用量を減らし、木材チップの購入量を増やしてきた。22年9月からは通常使う燃料を木材チップにして、シャワーなどの湯が大量に使われる繁忙期に灯油を補助的に使うようにしている。

22年度の灯油の年間使用量は6850リットルで、18年度比で8割以上減少。購入費は70万円だった。22年度に使用した木材チップは117トで、購入費は240万円。18年度と比べて灯油価格が高騰していることを考慮すると、燃料代の削減効果は大きいという。

木材チップは中信地方の林業関係者らでつくる会社、松本平森林エネルギー(松本市)から購入している。同社は松本広域森林組合(安曇野市)が松本市や安曇野市などで伐採した木をチップに加工。松枯れ被害を受けたアカマツは合板などに加工できないため、利用法が燃料などに限られるという。



同社の社員で森林組合職員でもある山本健太さん(54)は「伐採した場所から木材をあまり動かさずに使うのが一番エコ。エネルギーの地産地消につながる」とする。せせらぎの湯の指定管理者を務める奥原造園(松本市)の奥原正司社長(59)は「メインの燃料をチップに切り替えたところ、お湯がまるやかに変わったとお客さんに評判。供給も安定しており、石油燃料の価格高騰に悩む心配もない」と話す。市環境・地域エネルギー課は「チップボイラーをうまく運用すれば環境面で有効。今後普及させたい」とし、他の公共施設への導入を検討したいとしている。

間伐材や松枯れ被害木などを加工したチップ